

THE CENTER FOR SHIN BUDDHIST STUDIES 親鸞仏教センター通信

2015年12月1日発行

発行者 本多 弘之

編集・発行 親鸞仏教センター(真宗大谷派)

〒113-0023 東京都文京区向丘1-13-7

TEL. 03-3814-4900 FAX. 03-3814-4901

e-mail shinran-bc@higashihonganji.or.jp

ホームページ <http://shinran-bc.higashihonganji.or.jp>

Facebook <http://facebook.com/shinran.bc>

2015.12

第55号

What A Wonderful World

親鸞仏教センター研究員 名和 達宣

「なんて、この世界は……美しいんだ」

——遠藤周作の小説『女の一生 二部・サチ子の場合』(新潮文庫)の一場面である。現前の世界を「美しい」と称したのは、第二次世界大戦下、ナチスによってアウシュビッツ強制収容所に連行されていた一人の囚人である。何の^{よろこ}びもない、拷問による恐怖と悲惨だけが続く絶望の世界を生きていた人間が、ある神父の死を聞いた後、うるんだ硝子玉のような夕陽が落ちていくなかで思わず吐いた一言である。その神父は「愛がない世界ならば、愛をつくらねば…」という言葉^{のこ}を遺しつつ、他の囚人の身代わりとなって命を落とした。実在の人物がモデルであり、名をコルベと言う。

この場面に出くわしたとき、なぜか想起されたのは“What A Wonderful World”という歌だった。ルイ・アームストロングのしゃがれた歌声が印象的な名曲に、日本では「この素晴らしい世界」という題名がついた。はじめて耳にしたのは、英語の意味も何もわからない小学生のころ。数年後に『グッドモーニング、ベトナム』という映画を通じて、この歌の根底には、ベトナム戦争への深い悲嘆があることを知った。あの小説を読んでいるときに突然鳴り響いたのも、はたまたわが国の行く末を案じるごとに思い出されたのも、奥底に流れる悲しみが共振したからにちがいない。

あるとき、ふと思いついて「素晴らしい」とい

う言葉の語源を調べてみた。「さぞ“素晴らしい”意味が込められているのだろう」と期待していたが、意外なことに「狭くなる」を意味する動詞の「すばる(窄る)」が形容詞化されたもので、近世までは「ひどい」「とんでもない」といったネガティブな意味で用いられていたという。ならば“wonder”と“-ful(～に満ちた)”から成り立つ“wonderful”を「素晴らしい」という語で押さえるのは、決して適訳とは言いがたく、それこそ何かを狭めてしまうのではないかと強く感じた。

一方、仏教者の鈴木大拙は、長いあいだ仏法の不可思議なるはたらきを表す「妙」を英訳するのに苦慮していたが、ある日、偶然手にしたシェイクスピアの喜劇“As You Like It”(邦題「お気に召すまま」)のなかの一句に目が止まり、そこに「妙」なる世界を感じ取ったという。

O wonderful, wonderful,
and most wonderful wonderful!

And yet again wonderful...

仏教の歴史とは、このような「妙」なるものの遭遇を、言葉には表せられないと深く知りつつ、それでもなお、言葉に託して語り継いできた軌跡にほかならない。ちなみに、先の小説と歌は、いずれも最後は次世代への願いをもって結ばれる。どんなに平凡に思え、どんなに悲惨に映ろうとも、世界は“wonder”で満ち溢れている、と。

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

親鸞の生きた人生態度を、現代社会の大切な思想として掘り起こそうと、親鸞の思想・信念を時代社会の関心の言葉で思索し、考え直す試みとして公開講座を行っています。

「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」③④

信心は「虚無の身・無極の体」

親鸞仏教センター所長 本多 弘之



連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」の第83回から85回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われ、第83回では「随意所欲」等について、第84回では「正定聚」等について、85回では「第十一願成就文」等について、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第81回から一部を紹介する。

（嘱託研究員 越部良一）

■浄土の存在はみんな同じ

浄土の存在は、「ことごとく同じく一類にして、^{かたち}形異状なし」（『真宗聖典』39頁、東本願寺出版、以下『聖典』）。われわれがこの世を生きている身体、精神というものは、宿業因縁を受け一人ひとり違います。その違う宿業因縁を生きるがゆえに、孤独地獄に苦しんだりするわけですが、浄土に触れるとみんな同じだと。これは何を象徴しているのかというと、本願こそが自分の主体だという生活をするならば、本願がもし身体というものをもちつらば、みんな同じだと。如来の智慧をもって命とする、そういうものがもし命だと言えるなら、それはみんな同じだと。

こういう言葉を信頼することが浄土というものを生み出すのではないかと思うのです。われわれが生きている現象世界はみんな違います。無理矢理同じにしても必ず無理がくる。それでぶつかり合うわけです。だけど、どこかで根源的には同じものに触れなければたすからない。でも、それを

求めて得られないわけです。曾我量深先生は、求めて得られないのが方便化身土だとおっしゃった。人間は違いを強調するけれど、それでは孤独だからやっぱり平等とか共同とか一緒にということを要求する。要求するけれども虚偽である。こういう矛盾があります。その矛盾を破って、本当の平等は無限大悲にあると。無限大悲に触れるところに平等の救いがあると。^{サンガ}僧伽というものは、そういうことを信頼するのが僧伽だと私は思いますから、本願を命とするなら、本願において深い連帯が成り立つわけです。

■無限大の身体、形なき形としての信心

それで、浄土の存在は「自然虚無の身、無極の体を受けたり」（『聖典』同上）と。身というけれども虚無だと。体というけれども極まりがない。つまり、浄土というと何かこの世に生きているのと同じ形が浄土に往つてもあるようなイメージをもつけれども、そのようなものはないのだと。形といっても、虚無、ないのだと。極まりもないのだと。

だから浄土という場所も、浄土に生まれるというのも、生まれた身というものも、みんな譬喩的表現で、われわれが執られられている在り方を破った在り方に帰ることを呼びかけている。全部、象徴的表現だということが、浄土の教えの特徴ではないかと私は思うのです。それを実体化してしまうものだからわかりがなくなる。場所も実体化するし、生まれてもまだ実体があるように考えている。人間は執着が深いですから、身体がなくなっても靈魂は残るだろうとか。そう語っているのが

浄土ではないかと、人間の思いをそこに入れ込むわけです。それは全部方便化土です。方便化土は求めて得られない。本当の真実の世界は光の世界であり、精神が^{ひるがえ}翻された明るみの世界です。本願に触れて無量光の世界に生まれる。生まれるということも、これも実体的に何か違う世界に生まれるというイメージが強いわけですが、死して生まれるという宗教的な命に触れるということは、そうではない。執らわれの世界に死んで、新しい、解放された、宗教的な世界に生まれるのです。

この愚かな身、凡夫の命として、われわれは違う命、違うものに執着しているけれども、本願はこの愚かな衆生を平等に摂め取りたいという願ですから、本願を信ずることにおいて、その願においての平等、「願海平等」（『聖典』242頁）を信ずる。これを「大信海」（『聖典』236頁、356頁）、信心の海をいただくことだと親鸞は言うわけです。本願が無限なる命を呼びかけてきているのだと聞いて、本願を主体にする。つまり信心を主体にするということは、本願を信ずる信がわれわれの主体だと確認できるということです。もしそうになったら、その主体は信心が主体で、信心が浄土に生まれる主体ですから、信心が身体をもつといっても、その形は「虚無の身・無極の体」、無限大の身体、形なき形、そのようにしか言えないのだと思うのです。

そうした形なき世界に、我執のままで、骨がついて、肉がついたままで往けるかといったら往けないから、生まれ直したと、死んでからしか生まれられないと教える。でも、その教えは、文字通り死んでもう一度生まれるということではなくて、何か立場が翻る。つまり、無明の在り方から本願の在り方に立ち直す。「心を弘誓の^{しん}仏^{くぜい}地に^た樹て」（『聖典』400頁）と。弘誓の仏地に立った身体というのは、「虚無の身・無極の体」なのでしょう。真仏土の主体は本願で、阿弥陀は無限大だと言ってもよいし、念ずる人のところにあると言ってもよい。それは形がないのでしょう。

（文責：親鸞仏教センター）

親鸞仏教センターの動き

（2015年8月～10月）一抄出—

■ 2015年

- 8/3 第28回『教行信証』『化身土巻・末巻』研究会
第84回（通算第135回）連続講座「親鸞思想の
解明」（千代田区・東京国際フォーラム）
人事発令：松扉達主事、大谷綾書記補が発令
- 8/10 第1回宗務審議会「親鸞仏教センター施設改修
工事に関する委員会」
- 8/11 第178回英訳『教行信証』研究会
- 8/19 第157回清沢満之研究会
- 8/20 ご命日のつどい
第15回『西方指南抄』研究会
- 9/6 第74回日本宗教学学会学術大会（創価大学）
藤原研究員発表「専修念仏批判への応答—親鸞
の『弁証論』引用の一側面—」、名和研究員発表「西
田幾多郎と『教行信証』」
- 9/9 第29回『教行信証』『化身土巻・末巻』研究会
- 9/11 ご命日のつどい
第2回宗務審議会「親鸞仏教センター施設改修
工事に関する委員会」
- 9/17 第158回清沢満之研究会
- 9/19 日本印度学仏教学会（高野山大学）
藤原研究員発表「親鸞の末法観と『弁証論』」、
中村研究員発表「憬興『観経疏』復元の試みとその
思想的意義について」
- 9/25 第179回英訳『教行信証』研究会
- 9/28 第16回『西方指南抄』研究会
- 10/2 日本倫理学会 第66回大会 ワークショップ
「日本近代における「宗教哲学」の源流と形成」
名和研究員発表「「悲」の宗教哲学—清沢満之
と西田幾多郎—」
- 10/7 第3回宗務審議会「親鸞仏教センター施設改修
工事に関する委員会」
- 10/9 ご命日のつどい
第85回（通算第136回）連続講座「親鸞思想の
解明」（千代田区・東京国際フォーラム）
- 10/19 第180回英訳『教行信証』研究会
- 10/23 第158回清沢満之研究会
- 10/26 第30回『教行信証』『化身土巻・末巻』研究会
- 10/27 第17回『西方指南抄』研究会
- 10/30 第159回清沢満之研究会「清沢満之における儒
家的言語の意義について」大阪大学名誉教授：子安
宣邦氏（千代田区・AP東京八重洲通り）

親鸞『教行信証』(現代語訳) —鈴木大拙の英訳にもとづく 現代日本語訳— を刊行

親鸞仏教センターでは、2012年9月宗祖親鸞聖人750回御遠忌の記念事業として、しばらく入手困難であった鈴木大拙師訳の『英訳 教行信証』の改訂版を、Oxford University Press, INC. より、刊行した。この刊行にともない、新たな試みとして、他の言語を^く潜った『教行信証』から、現代の日本語へ表現し、親鸞思想を広く公開する目的で、再日本語化プロジェクトを立ち上げた。

再日本語化プロジェクトにあたっては、武田浩学氏(公益財団法人中村元東方研究所研究員、東京教区埼玉組真行寺住職)をプロジェクトチームリーダーとして、高海史氏(元当センター研究員、東京教区埼玉組了善寺副住職)、常塚聡氏(元当センター嘱託研究員)、ステファン・グレイス氏(元当センター嘱託研究員)と共に翻訳作業を行い、このたび、満を持してその成果を刊行するに至った。

ここに、武田氏が記した前文の一部を紹介する。

この国に生まれたのなら、生きている内に、読んでおくべきだ。親鸞(1173-1262)の代表作『教行信証』は、現代日本人にそう訴えるだけの力を有していると信ずる。

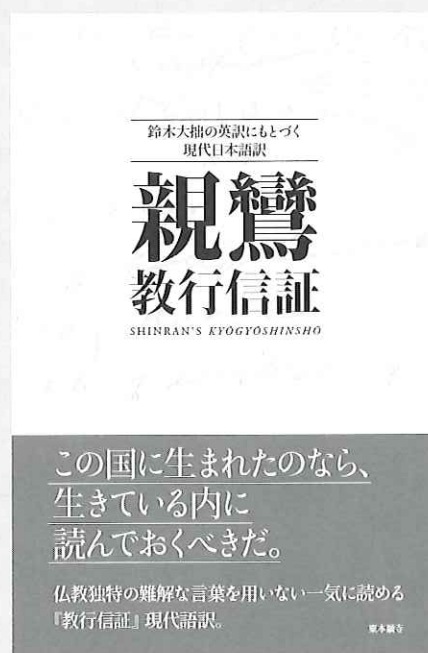
本書は、仏教独特の基礎的概念を習熟するのが目的なのではない。むしろ、そのような基礎を全く有しない人が、親鸞の思想を大まかに理解することができれば……という見果てぬ夢が込められている。

少し具体的に説明しよう。

言うまでもなく、『教行信証』は親鸞の主著であり、漢文で記された浄土真宗の根本聖典である。本書は、屈指の大学者、鈴木大拙によって50年ほど前に英訳され、2012年に再刊された『教行信証』、それを底本にして現代日本語に翻訳したものであって、親鸞のそれを直接に訳したものではない。要するに、漢文から英語へ、そして現代日本語へという、一

見、迂遠な道程を経たものである。しかし、この遠回りしたかのような作業が、実は、われわれ現代人が、閉鎖的な教養にとらわれずに、難解であっても未来永劫に輝き続けるはずの古典、『教行信証』に直接に親しむためには必須である、と密かに考える。

もとより、われわれは翻訳家ではなく、一介の仏教研究職人に過ぎない。それでも、あらん限りの努力を傾注したつもりである。われわれの能力が、学術教養はもとより人生経験においても、大拙には遥かに及ばない、ということは自明のことである。ましてや、対象が親鸞の代表作ともなれば、いかなる言語表現を駆使しようと敵うまい。したがって、われわれが現代的な日本語訳を試みるというのは、天空の雲を掴もうとするかの如き無謀な冒険なのだ。それゆえ、着手当初より今日まで、礼讓の自覚だけは肝に銘じた。



親鸞『教行信証』(現代語訳)

—鈴木大拙の英訳にもとづく現代日本語訳—

本書は、鈴木大拙の『英訳 教行信証』を再翻訳したものであり、翻訳に際しては「英文の正確な理解に努める」、「大拙氏の個性を尊重する」、「仏教独特の用語を極力用いない」といった点に配慮し、現代の日本人が通読できる新たな『教行信証』の形を表現している。

本体2,500円(税別)

お求めは東本願寺出版まで Tel 075-371-9189

親鸞仏教センター新施設へ移転

親鸞仏教センター施設 移転計画概要

親鸞仏教センターは、2001年7月東京都千代田区神田の仮事務所から始まった。その後、本郷の旧教学研究所東京分室の跡地に仮の建物を建て立ち上げたのが現在の親鸞仏教センターである。この地は、浩々堂発祥の地として知られる求道会館からほど近い場所である。しかしながら建物としては必要最小限の簡易なものであり、発足から14年たった今、手狭になってきたことや、施設の老朽化も深刻となってきたこと等、施設面で不都合をきたしていたことから新施設への移転が決定した。

移転に際しては、東京大学の南東側（湯島）にある物件を取得し、宗務審議会「親鸞仏教センター施設改修工事に関する委員会」を設置、施設改修内容および施設改修業者について慎重な審議が重ねられ、答申が提出された。その答申を受け、改修業者と綿密な調査、打ち合わせを重ねながら、改修工事を進めていく。竣工は3月末、開所は4月を予定している。

施設移転にともない、十分な広さの仏間兼会議

- 6F — 倉庫
- 5F — 中会議室
- 4F — 大谷大学真宗総合研究所東京分室（仮称）
- 3F — 仏間兼会議室・応接室
- 2F — 所長室・研究室・書庫・小会議室
- 1F — 事務所・オープンスペース
- B1F — 倉庫（親鸞仏教センター発行の三紙誌バックナンバー保管庫等）

新施設各フロアの紹介（予定）

室が確保されることから、これまで会場を借りて開催していた外部講師を招聘しての研究会および公開輪読会等がセンターで開催可能となる。また、所長室の設置及び研究員の研究業務スペースの拡張、研究業務に必要な書籍の収納スペースの拡張等により、さらなる研究活動が進むことが期待されるほか、多様な用途に資する中会議室やセンター発行の三紙誌バックナンバーの保管スペースまでもが確保される。さらに、施設4階を大谷大学真宗総合研究所東京分室（仮称）が使用することから、センターと大谷大学が所有する書籍や資料の共有化、研究員の交流も図ることが可能となる。

移転を機に、センター設立の願いを再確認し、さらに具体化していくことが必要であるとともに、出版社や大学が近くにある立地条件を生かし、宗派内学術関係機関及び他の研究機関並びに国内外の研究者及び有識者とのネットワーク作りを通して、引き続き現代社会に親鸞聖人の思想を発信していく。



現施設（移転前）

〒113-0023 東京都文京区向丘1-13-7
東京メトロ南北線「東大前」駅、2番出口から徒歩1分

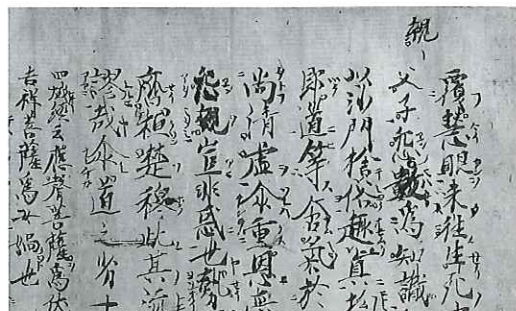


新施設（移転後）

〒113-0034 東京都文京区湯島2-19-11
都営地下鉄大江戸線「本郷三丁目」駅、5番出口から徒歩7分
東京メトロ丸の内線「本郷三丁目」駅、2番出口から徒歩8分
東京メトロ千代田線「湯島」駅、5番出口から徒歩7分

親鸞の用いた『弁正論』 をめぐって

親鸞仏教センター研究員 藤原 智



親鸞自筆 坂東本『教行信証』（東本願寺蔵）
「怨親教為知識」の「親」の字が上欄に補記される。

親鸞は主著『教行信証』『化身土巻・末巻』に『弁正論』を引用するが、親鸞が見たテキストはどのようなものだったのか。今回、国際仏教学大学院大学日本古写経研究所の全面的なご協力をいただき、親鸞在世時のいくつかの古写経『弁正論』を閲覧することができた。そして、その検討内容について、2015年11月7日に国際仏教学大学院大学公開研究会の場で発表を行った。本報告はその要約である。

■研究の動向

『教行信証』に引用された『弁正論』は、存覚『六要鈔』（1360）以来、原文との相違が非常に多いと指摘されてきた。近年『弁正論』の諸本を比較した藤場俊基は、『教行信証』の単独不一致箇所111例を数えている（『顕浄土方便化身土文類の研究』30頁）。藤場はその理由を依用本の問題と推測しているが、それは現在に至るまで確認されていない。

『弁正論』が日本にあった最も古い記録は、『正倉院文書』の天平19年（747）6月7日の書写記録にある「弁正論八巻」（『大日本古文書』9-391）という記述であり、次いで空海が大同元年（806）10月22日に上程した『請来目録』にある「弁正理論一部、八巻、法琳師撰」（大正55-1064-a）という記述である。今回、これらの流れをくむと推測される日本古写経『弁正論』を調査できた。それらは、現在一般的に見られる『弁正論』とは異なる系統のテキストであり、親鸞がこの系統を用いた可能性は高い。

■今回検討したテキストについて

今回は特に、以下の五つの一切経における『弁

正論』に注目した。

まず、大阪府河内長野市にある真言宗御室派の天野山金剛寺が伝える一切経（金剛寺本）である。嘉禎3年（1237）に薬師寺で書写されたものであり、親鸞65歳にあたる。

二つ目は、愛知県名古屋にある真言宗智山派の稲園山七寺（正覚院長福寺）が伝える一切経（七寺本）である。安元3年（1177）の書写になり、親鸞5歳にあたる。

三つ目は、京都市上京区にある臨済宗興聖寺が伝える一切経（興聖寺本）である。これは貞応3年（1224）に海住山寺で書写されたものであり、親鸞52歳にあたる。

四つ目は、高麗初雕版一切経（麗初本）である。これは寛和3年（987）に東大寺僧裔然が宋から請求した開宝蔵の覆刻と言われるものである。その請求本自体は天喜6年（1058）に焼失してしまうが、いくつかの転写本が伝えられている。なお、上記の興聖寺本には麗初本との共通点が多く、開宝蔵系の影響が考えられる。そうすると、親鸞もこの系統のテキストを見ていた可能性はある。

五つ目は、宮内庁書陵部所蔵、開元寺版一切経（開元寺本）である。これは紹興庚午年（1150）に宋で雕造されたものである。開元寺版一切経は親鸞の時代には日本にもたらされていた。

■『教行信証』と日本古写経『弁正論』

『教行信証』に特異な箇所として注目されてきた『弁正論』引用について、今回の検討結果のいくつかを記してみよう。なお便宜上『弁正論』の『大正大蔵経』での頁も示した。

まず、『教行信証』での引用冒頭に「十喻九箴篇

答李道士十異九述」という文がある。ここは十^{じゅう} 喻^ゆ 篇^{へん}の冒頭であるが(大正52-524-c)、金剛寺本には「十^{じゅう} 喻^ゆ 篇^{へん} 答李道士十異九述」とある。「述」と「迷」の違いの他は一致している。

次は通常「諂曲」(大正52-526-a-18)とある所を、親鸞が「諂典」と記している点である。これも金剛寺本には「諂典」とあり共通している。

三点目として「聖王之巨孝」(大正52-529-b-24)を挙げたい。ここの「巨孝」を親鸞は「臣孝」と記す。この点は、金剛寺本・七寺本・開元寺本が「臣孝」となっている。特に宋版の開元寺本が「臣孝」とあるのは注目される。

さらに列挙してみよう。「訪道」(大正52-530-a-16)→「謗道」:『教行信証』・金剛寺本・七寺本・興聖寺本。「問津」(大正52-530-a-16)→「問律」:『教行信証』・金剛寺本・興聖寺本。「都者親也」(大正52-536-b-9)→「都者都也」:『教行信証』・金剛寺本・七寺本・興聖寺本。

その他に指摘できる箇所は多くあるが、最も注目すべき箇所として『教行信証』で16文字が脱落している箇所を挙げたい(大正52-546-c-13)。藤場はこれを書写の際の1行脱落と推測したが(前掲書145頁)、宋版一切経は1行14字もしくは17字で統一され、その書写に際して16字の脱落は考えにくい。しかし、七寺本はその16字が1行で存在する。そして金剛寺本は、この16字が脱落しているのである。基本的に金剛寺本と七寺本は同系統と考えられるが、特に『教行信証』と金剛寺本との著しい近接性が見て取れよう。

最後に異なる結果も示したい。金剛寺本・七寺本に「怨数為知識」とある箇所について、宋版系の麗初本・開元寺本、さらに宋版の影響が見える興聖寺本には「怨親数为知識」(大正52-529-b-27)とある。そして、親鸞はこの箇所を「怨親数为知識」と宋版系と同様に記している。ただし、自筆本には書写の混乱も見られる(写真)。十分な検討が必要だが、この点について筆者は、親鸞が日本古写経系を底本としつつ、宋版系をもって校訂した結果ではないかと推測している。

以上簡略な報告に終わるが、まだ解決がつかない点も多くあり、今後の研究に期したい。

※金剛寺本閲覧には、国際仏教学大学院大学付属図書館日本古写経データベースを利用した。また今回の

調査のために、金剛寺・七寺・興聖寺・宮内庁書陵部および国際仏教学大学院大学日本古写経研究所御当局には格別のご高配いただいた。原本所蔵者及び関係各位には深く感謝申し上げる。

●出版物のご紹介

◇2015年安居本講

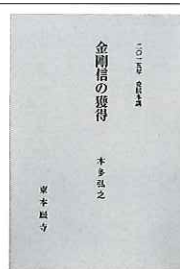
『金剛信の獲得』東本願寺出版

本体3,500円(税別)

真宗本廟、大谷大学において講義された2015年安居本講の当センター所長本多弘之の講録。

お求めは東本願寺出版まで

TEL 075-371-9189



◇伝道ブックス76

『親鸞聖人のお念仏』東本願寺出版

本体250円(税別)

2013年3月8日、当センターにて行われた「親鸞聖人ご命日のつどい」の法話をまとめた小冊子。当センター所長本多弘之の法話を収載。

お求めは東本願寺出版まで

TEL 075-371-9189



◇増補版

『親鸞教学』一曾我量深から安田理深へ』法蔵館

本体3,800円(税別)

絶版状態だったものを加筆・整理し、新たに「唯識思想と浄土真宗」を加えた増補版として発行された当センター所長本多弘之の著書。日本近代における親鸞思想の学びの特質を明らかにする。

お求めは法蔵館まで

TEL 075-343-5656



◇『曾我量深講話録(一)・(二)』大法輪閣

本体各2,700円(税別)

雑誌『中道』掲載の曾我量深の講話を再編集し書籍化(全五巻予定)。(一)は、まえがき、あとがきを当センター研究員藤原智が執筆。

お求めは大法輪閣まで

TEL 03-5466-1401



『法然聖人御說法事』の 形態をめぐる諸問題

親鸞仏教センター研究員 中村 玲太

親鸞筆による『西方指南抄』は、法然（1133～1212）の遺文を集めるものであるが、その第一番目にして最も長い遺文が『法然聖人御說法事』（以下、『御說法事』）である。この『御說法事』についてはその形態に関して解明すべき問題がある。これは思想とも直接関わる問題も含んでおり、『御說法事』の形態について本研究会を通して得られた知見を報告したい。

Ⅰ「真字」と「仮字」

『西方指南抄』所収の『御說法事』の異本として最重要なものが、望西楼了恵（1243～1330?）編纂『漢語灯録』所収の『逆修說法』（『御說法事』）の諸本について、「ただし多本を集むるに、あるいは真字有り、あるいは仮字有り。未だ何れか正ということを知らず」（『昭和新修 法然上人全集』〔以下、昭法全〕、273頁）として、「真字」（＝漢文体）、「仮字」（＝和文体）の二系統あることを伝えている。『西方指南抄』は「仮字」、『漢語灯録』は「真字」のものを収める。『御說法事』が和文体であることについて、古本『漢語灯録』と語句の用法に大きな差があることから「単に漢文を述べ書にしたものではないようである」（浅野教信『親鸞と浄土教義の研究』〔永田文昌堂、1998〕、132頁）とする見解もあるが、おそらく原漢文を和文に改めたものこそ『御說法事』であると考えられる。以下に、それが知られる一例を挙げたい。

『御說法事』には念仏往生が諸行往生にすぐれる理由を六つの面から説く箇所がある。そこで以



平生の研究会の様子

下のようにあることが注視される。

二には光明攝取なり。〔中略〕

三には弥陀みづからのたまはく、これはこれ
ばちだわ
跋陀和菩薩、極楽世界にまうでて、いづれの
行を修してか、このくにに往生し候べきと阿
弥陀仏にとひたてまつりしかば、ほとけ 仏こたへ
てのたまはく……。〔定本 親鸞聖人全集〕

〔以下、定親全〕五、30～31頁

この箇所は、①因位本願、②光明攝取、③弥陀自言、④釈迦付属、⑤諸仏証誠、⑥法滅往生、として、数字＋四字の熟語、によって念仏往生の功德を整理して主張する文脈である。『御說法事』では、「……のたまわく」として、後ろの文に直接つながるような形となっているが、直前の「二には光明攝取なり」と同様、「弥陀自言」で一度切るべきであって、弥陀が自ら述べた内容がその直後に来る、という構造ではない。その意味で、『昭法全』は、「三者弥陀自言、此是」として「此是」の前に読点を打っているが、ここは句点が適切であろう。なお『昭法全』は、直前の「二」は、「二者光明攝取。此是」と句点にしている。

いずれにせよ、「弥陀みづからのたまはく」では文脈的に極めて不自然である。この不自然さの原因は、先行する「弥陀自言」という一つの熟語的な四字を無理に訓読した結果なのではないだろうか。これは一例ではあるが、『御說法事』は、『逆修說法』とは違う系統の「真字」本を「仮字」に改めた可能性が十分に考えられよう。

「仮字」に改めたのであれば、改めた意義の考究

が次の課題として見えてくる。これについては改めた主体の問題も含めて、今後の研究課題である。

②親鸞と「乃至」

『御説法事』には多くの「乃至」、つまり省略がある。この省略について、「転写の際に親鸞独自の主観によってなされた割愛であったと解すべきと思うがいかがであろうか」（中野正明『法然遺文の基礎的研究』〔法蔵館、1994〕、110頁）と指摘されるが、筆者も『御説法事』の「乃至」は親鸞によるものだと考える。ここでは「乃至」されなかった箇所を通して、親鸞と「乃至」の問題を考えてみたい。

『御説法事』には以下のように「乃至」が登場する箇所がある。

いまこの『観無量寿経』に二のころあり。はじめには定散二善を修して往生することをあかし、つぎには名号を称して往生することをあかす。乃至『清浄覚経』の信・不信の因縁の文をひけり。この文のころは、浄土の法門をとくをききて、信向してみのけいよだつものは、過去にもこの法門をききて、いまかきねてきく人なり。いま信ずるがゆへに、決定して浄土に往生すべし。

（定親全五、25頁。※「乃至」は原割註）

『逆修説法』によれば、法然は「定散二善」の往生について『観無量寿経』に説かれる定善、散善について一つずつ説明している。対して、『御説法事』ではその「定散二善」が説かれる大部分が「乃至」されている。しかし、定善中では上述の『清浄覚経』に関する文のみは省略されていない。『清浄覚経』の登場は唐突にも思えるものであり、あえてこの箇所を残そうとする強い想いが認められよう。これは、あくまで往生の問題は「信」が中心的課題であることを示さんがためであり、ゆえに『清浄覚経』の引文は「乃至」せず、この箇所に明示したのだと推測される。

また、この後には、散善も全般的に省略されるのであるが、伝最澄撰の『末法灯明記』の引用だけは省略されていない。この『末法灯明記』は、

『教行信証』化身土巻・本巻にも長大な引用がある（詳細は、後に論文化を予定）。

こうした「信」への課題と『末法灯明記』への注目から見て、「乃至」の主体をあえて親鸞以外に想定することは難しいと考える。そこで引き続き本研究会を通して、この「乃至」からも親鸞が『西方指南抄』に込めた想いを読み解いていきたい。

■『アンジャリ』第30号刊行 (2015年12月1日)

- 大峯 顯「哲学は何のためか」
- 森岡清美「熟議を欠く多数決は本当に民主的か」
- 石川文洋「命は宝です」
- 永井 均「自己ぎりの自己、とその蔓」
- 業田良家「行為（運動）は無くならない」
- 多田克己「鬼と妖怪の誕生—妖怪に形をあたえた仏教」
- 池上重輔「経営人材育成雑感」
- 安田浩一「ヘイトスピーチが「壊す」ものは何か」
- 山田 真「私たちが「ホモ・アトミクス」にならないために」
- 本多弘之「欲生心の象徴的自覚（8）」
- 中村玲太「唐突な自分」

anjali30



■『現代と親鸞』第31号刊行 (2015年12月1日)

- 研究論文「金剛心の獲得とは？」本多弘之／「『教行信証』『化身土巻』の『弁正論』引用について」藤原 智／「西田幾多郎と『教行信証』—最後の完成論文「場所的論理と宗教的世界観」執筆の背景—」名和達宣
- 現代と親鸞の研究会「悲しみの彼方、彼方の悲しみ」若松英輔
- 清沢満之研究会「清沢満之の「宗教」および「宗教哲学」における「哲学」の意味」杉本耕一
- 『西方指南抄』研究会「院政期から鎌倉期にかけての遁世—法然の遁世は他の遁世と異なるのか—」菱輪顕量
- 第12回親鸞仏教センター研究交流サロン「〈孤独〉の可能性—心理臨床の視点から—」発題：諸富祥彦
- 連続講座「親鸞思想の解明」
「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—（18）」
本多弘之

現代と親鸞
第 31 号

編集長	本多弘之
編集委員	大峯 顯、森岡清美、石川文洋、永井 均、業田良家、多田克己、池上重輔、安田浩一、山田 真、本多弘之、中村玲太
発行所	親鸞仏教センター
発行日	2015年11月

とは、(高氏によって建てられた)「斉」という王朝の初めに、ということ。す。「猶在」ですから、曇鸞大師は、その魏から斉に至る、二つの時代にわたって生きておられた、ということです。「神智高遠」とは、曇鸞和尚は、智慧がとても優れていらつしやったということ。「三國知聞」とは、「三國」、つまり「魏」と「斉」と「梁」という三つの国の世に生きておられ「注1」、「知聞」ですから、「曇鸞」という名が広く親しまれ、この三つの国々の時代、多くの民衆に深く尊ばれていた、ということです。「洞曉衆經」とは、あらゆる經典に深く精通しておられた、ということで、「独出人外」とは、あらゆる人に抜きんでて優れた方であつた、ということです。「梁国の天子」というのは、「梁」という王朝の王で、「蕭王」と呼ばれた方のことです「注2」。

「恒向北礼」とは、梁のこの王は曇鸞を菩薩として崇め、曇鸞のおられる北の方角にいつも礼拝しておられた、ということです。

「註解往生論」とは、曇鸞が世親の『浄土論』を詳しく解釈なさつて、「註論(浄土論註)」という、阿弥陀の本願を明かす「論」をお作りになつた、ということです。「裁成兩卷」ですから、その『註論』とは上下二巻に分けて著されているのです。「釈迦才の三巻の浄土論」というのは、「釈迦才」の「釈」とは、お釈迦さまの教えをいただいた弟子であることを表す言葉です。「迦才」とは、浄土の教えを歩まれた先達で、知者であつたと言われています。この方が三巻の『浄土論』を著しておられ、そのなかにこの曇鸞和尚の事跡が示されている、ということです。

【注1】

・「魏」(北魏、386-534〔東〕/534〔西〕)・鮮卑族の拓跋珪(道武帝)による建国。南北朝時代の、北朝最初の国。五三四年に東魏と西魏に分裂。

すぐれたりとなり。「梁国の天子」というのは、梁の世の王というなり。蕭王のななり。「恒向北礼」というのは、梁の王つねに曇鸞の北のかたにましましけるを、菩薩と礼したてまつりたまひけるなり。「註解往生論」というのは、この『浄土論』をくわしう釈したまうを、「註論」ともうす論をつくりたまへるなり。「裁成兩卷」というのは、『註論』は二巻になしたまうなり。「釈迦才の三巻の浄土論」というのは、釈迦才ともうすは、釈というは、釈尊の御弟子とあらわすことばなり。迦才は、浄土宗の祖師なり。知者にておわせし人なり。かの聖人の三巻の『浄土論』をつくりたまへるに、この曇鸞の御ことはあらわせりとなり。

(『真宗聖典』五一九〜五二〇頁)

《参考》(ページはすべて『真宗聖典』)

◆梁国天子蕭王 恒向北礼鸞菩薩

■本師曇鸞は、梁の天子 常に鸞のところに向こうて、菩薩と礼したてまつる。三蔵流支、浄教を授けしかば、仙經を焚焼して楽邦に歸したまひき。

(二〇六頁「行巻」「正信偈」)

■本師曇鸞大師をば 梁の天子蕭王はおわせしかたにつねにむき 鸞菩薩とぞ礼しける (四九四頁「曇鸞讚」)

◆その他補足

■世俗の君子幸臨し 勅して浄土のゆえをとう 十方仏国浄土なり なによりてか西にある／鸞師こたえて

のたまわく わが身は智慧あさくして いまだ地位にいらざれば 念力ひとしくおよばれず／一切道俗もろともに 歸すべきところぞさらになき 安樂勸 歸のこころざし 鸞師ひとりさだめたり／魏の主勅して并州の大巖寺にぞおわしける ようやくおわりにのぞみては 汾州にうつりたまひにき／魏の天子はとうとみて 神鸞とこそ号せしか おわせしところのその名をば 鸞公巖とぞなづけたる／浄業さかりにすすめつつ 玄忠寺にぞおわしける 魏の興和四年に 遙山寺にこそうつりしか

(四九一〜四九二頁「曇鸞讚」)

「曇鸞和尚の銘文」

「親鸞」という名は「天親」と「曇鸞」のそれぞれ一字に由来すると
言われる。また、『教行信証』にとつて、両者が著述した『浄土論』およ
び『浄土論註』は非常に大きな位置を占めている。しかし、本『銘文』
において、思想的内容が深く語り出される天親の銘に対して、曇鸞はそ
の行実が描かれるのみである。

一個人をほめ讃えるということとは、ともすれば相手への一方的な傾斜
や全面的な肯定に陥ってしまう。信頼や尊敬と言えは聞こえはいいが、
実際はただ、自らが負うべき責任を相手に預けてしまっている場合が多
い。そのような信とは結局、屈折した自己主張の表れにすぎないだろう。
相手を敬っているつもりが、足蹴にしているのかもしれない。

曇鸞に対する親鸞の關係がそうではないのは、その讃嘆が個人を超え
た「真実」に焦点を結んでいるためだ。「神智高遠 三国知聞」や「梁国
天子蕭王 恒向北礼鸞菩薩」といった句は、個人に向けられているよう
で、実はそうした關係の場を開いている本願を讃えている。状況によつ
てくついたり離れたりする人間關係を生きる私たちに、人と人との本
当に尊敬し合える場とは何か、と問われている。(元研究員 内記洸)

現代語

「釈の曇鸞法師は并州の汶水県の人なり。」并州とは「州」と
いう大きな区域を指す名前で、「汶水県」とはそのなかの「県」とい
う小さな地域を指す言葉です。「魏末高齊之初猶在」というのは、
「魏末」とは中国にあった王朝の名前です。その「末」ですから、
「魏」という王朝の終わりのころに、ということ。高齊之初

・「齊」(北齊, 550-577)・・・南北朝時代の北朝の一つで、東魏の大丞相高洋が帝
位を奪って建国。南朝の齊に対して北齊と呼ぶ。本銘文には「高齊」(高氏の
齊)とある。

・「梁」(502-557)・・・南北朝時代の南朝の一つ。五〇二年、蕭衍が南齊の帝位を
奪って創設。

〔注2〕

・「蕭王」・・・蕭衍(504-549)。南朝梁の初代皇帝(武帝)。五〇二年、南齊の和帝の
禅譲によって帝位に就く。仏教を篤く信奉。

原文

齊朝の曇鸞和尚の真像の銘文

「釈曇鸞法師者并州汶水県人也。魏末高齊之初猶在

神智高遠 三国知聞 洞曉衆經 独出人外

梁国天子蕭王 恒向北礼鸞菩薩 註解往生論

裁成兩卷 事出釈迦才三卷浄土論也」文

「釈の曇鸞法師は并州の汶水県の人なり。」并州はくにのななり、
汶水県はところのななり。「魏末高齊之初猶在」というのは、魏末とい
うは、晨旦の世のななり。末は、すえというなり。魏の世のすえとな
り。高齊之初は、齊という世のはじめというなり。猶在は、魏と齊と
の世になおいましきというなり。「神智高遠」というのは、和尚の智慧
すぐれていましけりとなり。「三国知聞」というのは、三国は魏と齊と
梁とこのみつの世におわせしとなり。知聞というは、みつの世にしら
れきこえたまいきとなり。「洞曉衆經」というのは、あきらかによろず
の經典をさとりたまうとなり。「独出人外」というのは、よろずの人に

「悲願」 参加者募集中!

2015年度の公開輪読会は「悲願」をテーマに、下記のとおり開催します。当センターの研究員と共に仏教の聖

■「わが心深き底あり—西田幾多郎と浄土真宗—」(全4回)

【趣旨文】 西田幾多郎は、たび重なる「人生の悲哀」を動機として「悪戦苦闘のドキュメント」と称する作品を残した哲学者である。一般には禅との関わりがよく知られるが、若きころより親鸞の思想にも深い共鳴を示しており、デビュー作の『善の研究』から最晩年の論文「場所的論理と宗教的世界観」に至るまで、生涯を一貫してその

典をひもとき、人類の歴史を貫いてあきらかにされてきた仏教の言葉に、現代を生きる力を見いだしていきたいと思います。

初めての方もどうぞお気軽にご参加ください。

痕跡を見いだすことができる。本輪読会では「悲」という視座より、西田が親鸞と出会った場所をたずねていきたい。

期日：2015年12月4日(金)、11日(金)
18日(金)、25日(金)

担当：名和達宣(なわ たつり) 研究員



■「すでにして悲願います—『教行信証』『化身土巻』を読む—」(全4回)

【趣旨文】 親鸞が真実教と仰いだ『大無量寿経』、そこに説かれるのは一切衆生を救済しようという阿彌陀仏の願い、いわゆる四十八願である。その願のうち、親鸞は主として八つの願に着目するが、主著『教行信証』においては特に第十九願、第二十願を「悲願」と呼ぶ。そしてこの二願を中心として、論述されるのが「方便化身土巻」で

ある。親鸞が、方便の悲願という受け止めに見たものは何であったのか。『化身土巻』を読みながら、これを探っていきたい。

期日：2016年1月8日(金)、15日(金)
22日(金)、29日(金)

担当：藤原 智(ふじわら さとる) 研究員



■「大悲の驚歎—善導『観経疏』を読む—」(全4回)

【趣旨文】 浄土における「悲」と「願」とは何か。この問いを自己の身に受けて考究した嚆矢は何といっても善導(613~681)であろう。本来動かざる真如をして動かし、大悲として立ち上がらせた深き因縁を自己の罪業に見た善導は、凡夫の身に「願往生心」がいかに発起し得るのかを突き詰めていった。弥陀の「悲願」と衆生の「願往

生心」。交差するこの二つの問題を、日本にも多大な影響を与えた善導の『観経疏』を読み解きながら探っていきたい。

期日：2016年2月5日(金)、12日(金)
19日(金)、26日(金)

担当：中村玲太(なかむら りょうた) 研究員



■時 間：いずれも午後6時30分～8時30分

■資料代：500円 初回受付にてお支払いください。

※テキスト及び資料は当方で準備いたします。

■会 場：東京大学仏教青年会会館ホール

(文京区本郷三丁目・三菱UFJニコス本郷ビル2階)

■お申し込み：参加ご希望の方は、下記問い合わせ先までご連絡ください。定員35名。連続12回の講座ですが途中参加も歓迎です。

問い合わせ先
親鸞仏教センター 〒113-0023 東京都文京区向丘1-13-7
TEL 03-3814-4900 FAX 03-3814-4901
E-mail shinran-bc@higashihonganji.or.jp

リレーコラム

「近代教学の足跡を尋ねて」第5回 (夏目漱石)

名前はないが、文京区・千駄木には有名な猫がいる。『吾輩ハ猫デアル』(明治38)のあの猫だ。

親鸞仏教センターからほど近い、日本医科大学附属医院横の道を北へ進むと、「夏目漱石旧居跡」との碑がある。題字は川端康成。塀の上には、猫の像がちょこんと置かれている。明治36年からの3年間、漱石は猫と共にここに住んだ。

清沢満之と漱石にはいくつか接点がある。兩人とも哲学会の『哲学会雑誌』(のち『哲学雑誌』)の編集委員を任され、漱石の蔵書には安藤州一の『清沢先生信仰座談』があり、傍線の書き込みもあるという。さらに『吾輩ハ猫デアル』の八木独仙、『こころ』のKは、清沢がモデルだとする説もある。清沢と漱石の連繋やいかに——。

酔っぱらって水甕に落ちた猫はもがくのをやめ、「天地を粉塵して不思議の太平に入」らんと、「南無阿彌陀仏南無阿彌陀仏」と鳴いた。ちなみに、『吾輩ハ猫デアル』の挿絵は中村不折。雑誌『精神界』の表紙を手がけた人物である。(大澤)



夏目漱石旧居跡

行事日程のご案内

■親鸞思想の解明

日 時：2015年12月9日(水) 18時30分～21時
2016年1月14日(木) 18時30分～21時
2月15日(月) 18時30分～21時

会 場：東京国際フォーラム ガラス棟(G棟)

■ご命日のつどい(毎月第2金曜日)

日 時：2015年12月11日(金) 10時～11時30分
2016年1月8日(金) 10時～11時30分
2月12日(金) 10時～11時30分

会 場：親鸞仏教センター会議室

上記共に、事前申込み不要・無料です。

センター新スタッフの紹介

主 事	しょう ひ	とおる
	松 扉	達
書記補	おお たに	あや
	大 谷	綾

■ホームページ

一部記事はホームページでもご覧いただけます。

親鸞仏教センター

検索

click

<http://shinran-bc.higashihonganji.or.jp>

